

数学Ⅰ，数学A

〔2〕 太郎さんと花子さんは，令和4年度の全国体力・運動能力，運動習慣等調査
(15点) (47都道府県ごと)の結果を用いて，小学校第5学年の男子児童と中学校第2
学年の男子生徒について，「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすること
は好きですか」という質問に対して，好きと回答した児童・生徒の割合」(以
下，スポーツ好き)と「反復横とびの点数の平均値」(以下，反復横とび)の関係
を調べることにした。

なお，以下の図については，スポーツ庁のWebページをもとに作成している。

- (1) 太郎さんは，スポーツ好きと反復横とびについて，小学校第5学年と中学校第2学年を合わせて図1のような散布図を作成した。

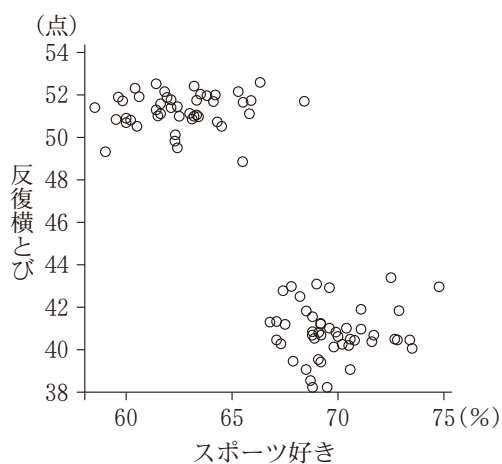


図1 スポーツ好きと反復横とびの散布図

太郎さんと花子さんは、図 1 について話している。

太郎：図 1 の点全体の散らばりの様子を見ると負の相関があるように思えるけど、一つの集団に見えないね。

花子：仮に、全体のデータで相関係数を計算したらどうなるかな。

図 1 におけるスポーツ好きと反復横とびの相関係数は -0.85 であった。図 1 の点全体の散らばりの様子から、小学校第 5 学年と中学校第 2 学年を合わせた全体について、スポーツ好きと反復横とびの間に負の相関があるとしたとき、次のことがいえる。

小学校第 5 学年と中学校第 2 学年を合わせた全体について、スポーツ好きが増えると、反復横とびは 。減る傾向がみられる
ス(2点)

については、最も適当なものを、次の①～③のうちから一つ選べ。

- ① 増える傾向がみられる
- ② 減る傾向がみられる
- ③ 増える傾向も減る傾向もみられない

数学 I，数学 A

(2) 太郎さんと花子さんは，(1)を振り返りながら話している。

太郎：図 1 では二つの集団に見えるから，小学校第 5 学年と中学校第 2 学年は別々にして考えた方がいいよね。

花子：それぞれの散布図を作成して，相関係数も調べてみよう。

図 2 は小学校第 5 学年について，図 3 は中学校第 2 学年について，スポーツ好きと反復横とびの散布図を作成したものである。

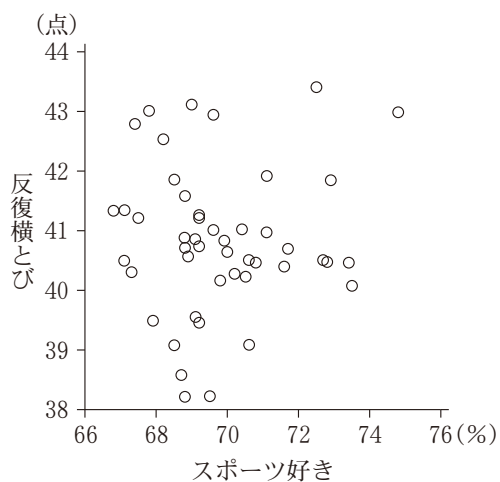


図 2 スポーツ好きと反復横とびの
散布図(小学校第 5 学年)

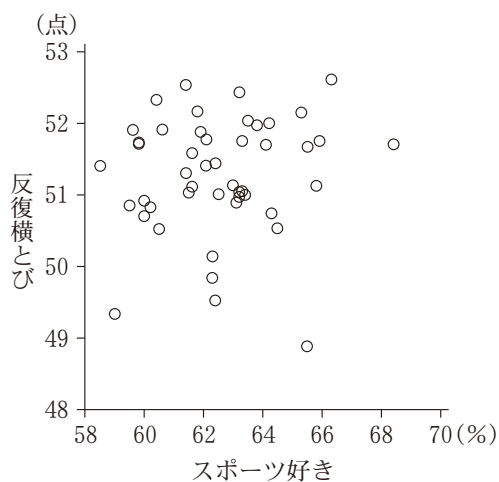


図 3 スポーツ好きと反復横とびの
散布図(中学校第 2 学年)

数学 I， 数学 A

図 2 におけるスポーツ好きと反復横とびの相関係数は 0.07 であった。

図 3 におけるスポーツ好きと反復横とびの相関係数はおよそ である。
セ (2点)

図 3 の相関係数は 図 2 の相関係数とほぼ同じ
(ともに相関がないようにみえる)

については，最も適当なものを，次の ①～④のうちから一つ選べ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | - 0.9 | ② | - 0.7 | ③ | 0.1 | ④ | 0.7 | ⑤ | 0.9 |
|---|-------|---|-------|---|-----|---|-----|---|-----|

数学 I，数学 A

- (3) 太郎さんと花子さんは、散布図においていくつかの集団があるときの全体の相関係数について関心をもち、簡単な例で考えることにした。

変数 x , y の値の組

$$(-1, 1), (1, -1)$$

を考える。このとき、相関係数は -1 となる。

この二つの値の組に、 $(-2, 0)$, $(0, -2)$ と $(0, 2)$, $(2, 0)$ を加えた、合計六つの値の組を、データ W と呼ぶことにする。また、データ W の x , y の平均値をそれぞれ $\bar{x}$, $\bar{y}$, 分散をそれぞれ s_x^2 , s_y^2 , 共分散を s_{xy} とする。

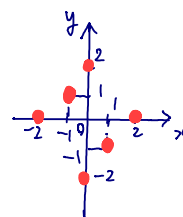
データ W の x と y の相関係数を r_{xy} とし、この r_{xy} について考えよう。なお、必要に応じて、次に示す表 1 の計算表を用いて考えてもよい。

表 1 計算表

x	y	$x - \bar{x}$	$y - \bar{y}$	$(x - \bar{x})(y - \bar{y})$
-1	1	-1	1	-1
1	-1	1	-1	-1
-2	0	-2	0	0
0	-2	0	-2	0
0	2	0	2	0
2	0	2	0	0

合計

$$0 \quad 0$$



$$\begin{aligned} \bar{x} &= 0, \bar{y} = 0 \\ s_x^2 &= \frac{(-1)^2 + 1^2 + (-2)^2 + 0^2 + 0^2 + 2^2}{6} = \frac{1+1+4+0+0+4}{6} = \frac{10}{6} = \frac{5}{3} \\ s_y^2 &= \frac{5}{3} \\ s_{xy} &= \frac{(-1)(1) + (1)(-1) + (-2)(0) + (0)(-2) + (0)(2) + (2)(0)}{6} = \frac{-1-1+0+0+0+0}{6} = -\frac{1}{3} \\ r_{xy} &= \frac{s_{xy}}{s_x s_y} = \frac{-\frac{1}{3}}{\frac{5}{3}} = -\frac{1}{5} \end{aligned}$$

- (i) $\bar{x} =$, $s_x^2 =$, $s_{xy} =$ である。
ソ (2点) タ (2点) チ (2点)

の解答群

☒ 0	☐ 1	☐ 2	☐ 3	☐ $\frac{1}{2}$
☐ $\frac{4}{3}$	☐ $\frac{3}{2}$	☐ $\frac{5}{3}$	☐ $\frac{11}{6}$	☐ $\frac{5}{2}$

の解答群

☐ $\frac{7}{6}$	☐ 1	☐ 2	☐ 3	☐ $\frac{4}{3}$
☐ 5	☐ $\frac{3}{2}$	☒ $\frac{5}{3}$	☐ $\frac{11}{6}$	☐ 10

の解答群

☐ 0	☐ 1	☐ $-\frac{3}{2}$	☐ -1	☐ $-\frac{1}{2}$
☒ $-\frac{1}{3}$	☐ $\frac{1}{3}$	☐ $\frac{1}{2}$	☐ $\frac{3}{2}$	

- (ii) $s_x^2 = s_y^2$ であることに着目すると, $r_{xy} =$ となることがわかる。
ツ (2点)

の解答群

☐ 0	☐ $-\frac{2}{3}$	☐ $-\frac{1}{2}$	☒ $-\frac{1}{5}$	☐ $-\frac{1}{6}$
☐ $\frac{1}{6}$	☐ $\frac{1}{5}$	☐ $\frac{1}{2}$	☐ $\frac{2}{3}$	

数学 I, 数学 A

(4) a を正の数とする。変数 x, y の二つの値の組 $(-1, 1), (1, -1)$ に

$$(-1-a, 1-a), (1-a, -1-a), \quad \bar{x} = 0$$

$$(-1+a, 1+a), (1+a, -1+a) \quad \bar{y} = 0$$

を加えた、合計六つの値の組を、データ W と呼ぶことにする。

相関係数が正であるための必要十分条件は、共分散が正であることである。したがって、データ W の x と y の相関係数が正であるための必要十分条件は

$$a > \frac{\sqrt{\boxed{6}}}{\boxed{2}} \quad \begin{matrix} \bar{y} \\ \text{ト (3点)} \end{matrix}$$

$$r_{xy} = \frac{S_{xy}}{S_x S_y}$$

$$S_x > 0, S_y > 0 \text{ ならば}$$

$$r_{xy} > 0 \Leftrightarrow S_{xy} > 0$$

である。

x	y	$x - \bar{x}$	$y - \bar{y}$	$(x - \bar{x})(y - \bar{y})$
-1	1	-1	1	-1
1	-1	1	-1	-1
-1-a	1-a	-(1+a)	1-a	a^2-1
1-a	-1-a	1-a	-(1+a)	a^2-1
-1+a	1+a	-(1-a)	1+a	a^2-1
1+a	-1+a	1+a	-(1-a)	a^2-1

$$\leftarrow -(1+a)(1-a) = -(1-a^2) = a^2-1$$

合計

0 0

$$W' \text{ に ついて } S_{xy} = \frac{4(a^2-1)-2}{6} = \frac{4a^2-6}{6}$$

$$S_{xy} > 0 \text{ となるのは } 4a^2-6 > 0$$

$$a^2 > \frac{6}{4}$$

$$a > 0 \text{ であるから } a > \frac{\sqrt{6}}{2} \quad \begin{matrix} \bar{y} \\ \text{ト} \end{matrix}$$